

誰のための議会改革か これからも開かれた議会に向けて改革は続く

松下寿美枝 富良野市議会議員・議会技術研究会会長

富良野市議会では二〇二二年六月定例会にて、これまで一八名だった議員定数を一六名に変更する条例案が全会一致で可決された。この結論に至るまでには、富良野市議会の中で長い議論の積み重ねがある。しかし、私自身が議員になったのは三年前で、一年生議員として富良野市議会の中で見てきたことなどを書きたいと思う。

私が議員となった時には「議会改革特別委員会」が設置されており、私が所属する会派からは、新人の私がその委員会に入ることになった。新人議員には少々荷が重いと感じたが、先輩議員からは、「これから市民に開かれた議会を本気で目指していかなければいけない。市民の目線で見てきた議会に対し、もつとこうしたら市民にとって身近な議会になるのではないか、そうしたアイデアを含めて意見や提案をしてほしい」と言われ、私自身もこれも議会の開催などを考えていたこともあり、引き受けた。

ところが、正副委員長を決める最初の委員会で、私を副委員長に推す声があがった。他の委員は当然ベテラン議員ばかりである。一委員ならまだしも、議論の駆け引きやまとめることができるのだろうか、と悩んだ末、会派の先輩議員に議会改革特別委員会の委員をお願いすることにした。

議会改革特別委員会では前述した「子ども議会」のほかに、「議会モニター制度」も議論されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大以降、人を集めることが難しくなり、実施は見送られたままだ。それ以降の議論は「議員定数」が改革の中心に据えられた。議論の経過や、市民向けに実施した議員定数に関するアンケートの結果などは市議会ホームページに情報公開・提供した上で、冒頭に書いたような結論に至った。

また、議会ICTプロジェクトチームも発足し、議会事務局と議員の連絡手段なども変化してきた。当選直後、議会事務局からファックスでのやりとりを提案された。当時はファックスを使わない生活に切り替えたところだったので戸惑ったが、それから三年経った今、議会事務局の協力もあってアプリによる出欠確認や資料のやり取り、情報の共有などもスマホやタブレット、パソコンなどで可能となり、議会広報の原稿や写真の投稿も手軽にできるようになった。

新型コロナウイルス感染拡大は議会の運営に大きな影響を与えたが、富良野市議会では人を集めるような議会改革ができなかったものの、電子化など今までやってこなかったところに着手でき、

議会全体としてはプラスとなったと感じている。電子化に関しては「習うより慣れる」の精神で、それぞれの議員が奮闘中である。これらの変革が、市民に開かれた議会にどのようなつながっていくのか。市民に開かれた議会に向けての改革としては、まだ道半ばだと感じている。

ただ、コロナ禍によるオンライン化によって対面の方が減ったのも事実である。市議会が主体で行う議会報告会も開催も見送られ、次の年にはYouTube配信で議会報告会を実施した。オンラインの利便さはあるが、一方的な配信だと反応はわかりにくい。より積極的に、市民の意見に耳を傾けることが必要だと感じた。

そして、議員としての自己研鑽の必要性も強く感じている。私が議員になった際、隣の女性議員から、「新人、若手議員が集まって勉強会をしませんか?」と呼びかけていただいた。引退した先輩議員から「議員は孤独になることが多いから、仲間を作りなさい」と教えを受けこともあり、以来その集まりに参加している。こうした交流から多様な視点や認め合うことの大切さを学ぶことで、自分自身の視野が広がり、それが議員活動にも活かされていけば、市民に開かれた議会となり議会活性化にもつながっていくのではないかと考えている。

議員定数を考える際に沢山の方に意見を聞いた時には、未だに「議員はどこで何をしているのか」「姿が見えない」と言った声も少なくなかった。議員定数は削減され、より姿が見えなくなるようでは困る。議員として、不断の努力が必要である、と自戒を込めて。

へまつした すみえ